ANOTHER BAKA STORY～バカとテストと召喚獣＋～

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＮＯＴＨＥＲ　ＢＡＫＡ　ＳＴＯＲＹ～バカとテストと召喚獣＋～

【Ｎコード】
Ｎ７５９３Ｓ

【作者名】
日向　剛

【あらすじ】
―この作品は本編とはまるで無関係であり、キャラ設定等がファンからすると「？」となると思いますが、あくまで「作者が違う劣化品」と思って頂いて結構でございます―
場所、キャラの設定は基本的に原作と変わりません（むしろ変えたら苦情の嵐でしょうし…）
後は私のオリジナル作品『∞ＣＨＡＯＳ』のキャラも随時参戦させ

ちゃいます

どうかお馬鹿ストーリーを存分にお楽しみくださいませ

問題提起

―この作品は本編とはまるで無関係であり、キャラ設定等がファンからすると「？」となると思いますが、あくまで「作者が違う劣化品」と思って頂いて結構でございます―

場所、キャラの設定は基本的に原作と変わりません（むしろ変えたら苦情の嵐でしょうし…）
後は私のオリジナル作品『∞ＣＨＡＯＳ』のキャラも随時参戦させちゃいます

どうかお馬鹿ストーリーを存分にお楽しみくださいませ

メインキャラ
吉井明久
坂本雄二
木下秀吉
島田美波
姫路瑞希
その他

俺と雄二とFクラス模擬戦…第一問

バカテスト－現文－
問題、●の中に適切な言葉を入れ、ことわざを完成させよ

●の顔も三度まで

姫路瑞希の答え
「仏」
先生のコメント
正解です。姫路さんには簡単すぎましたかね。
島田美波の答え
「イム」
先生のコメント
仏をイムと読んだのは貴女が初めてです。
吉井明久の答え
「姉さんの笑顔」
先生のコメント
君のお姉さんは仏ですか。

「…なぁ雄二」
「なんだ明久、金は貸さないぞ」
「そんなに僕は貧乏じゃないよ！今は姉さんもいるから一応しっかりした生活しなきゃいけないし」
「ならなんだ。お前が俺に何か聞くって事は対してロクな事じゃないだろ」
「そこの所はするどいんだね。…朝鉄人が行ってた話、ホントにやるの？」
朝のＨＲが終わり、僕は近くに居た坂本雄二にＨＲで言われた話の

内容について問いただしてた。なんでも鉄人は「今日は試召システムを有効に使うようにするためにクラス内で大会を開く」らしいが…
「雄二よ、その話はワシも疑問なのじゃ。何故今になってこのような事をせねばなるまい？」
「……確かに、意図が見えない」その会話に混じってきたのはクラスの男…美少女の木下秀吉。彼は「ワシは男だ！」と言い張るが、周りはあまりそうは思ってないみたい。そしてもう一人、カメラを持った男子が土屋康太。余りに余った性知識から愛称は「ムッツリーニ」だ
「正直俺にも分からない。学園長なら何か知ってるかもしれないが…」
「でも確かあのババアは今出張で居ないんじゃ無かったっけ？」
「そうなんだよ。だから鉄人が一人で考えたかとも思ってるんだが…」
「アキ、何の話してるの？」
「坂本君も難しい顔してますけど、何かありましたか？」
さらにその会話の中にポニーテールが可愛い女の子、島田美波と男ばかりのFクラスの癒し系、姫路瑞希さんが来た。彼女らもその話題に疑問を抱いていたようだ。雄二はかつて神童とまで言われた男だから何か掴んでいると皆は思っていたようだ
「皆までそう俺に寄るな。俺にも分からないことがある」
「…あたしの事とか」
「そうそう、翔子の事が…って、翔子！？なんでここに！？」
「あ、今日翔子ちゃんと朝たまたま会って、クラスまで一緒に来てたんですよ♪」
「…雄二、鈍感」
「うるさい！」
長い黒髪を静かになびかせるのはAクラスの霧島翔子さん。不覚にも雄二が好きになったらしい
「…でもその話、Fクラスだけじゃないみたい」

「ん？どういう事だ翔子」
「…私や愛子、優子、利光にも声がかかってるの」
「……主要キャラ」
「？ムッツリーニ、今何か言った？」
「……独り言」
でも僕も引っ掛かる。今のところ呼ばれた生徒がリストアップされてたんだけど吉井明久、坂本雄二
木下秀吉、土屋康太
島田美波、姫路瑞希
須川亮、霧島翔子
木下優子、工藤愛子
久保利光、清水美春
これはまたすごいメンバーだよなぁ…（須川君も選ばれるとは…）
このメンバーで大会って、鉄人は本気なのかな
「雄二、鉄人の意図は分かりそう？」
「俺の予想は一つだけあるんだが、その予想は俺にとっては非常にめんどくさい事になるな」
「ふむ、面倒くさいとは具体的にどのような事なのじゃ？」
「多分他学年との交流試合とかそんな感じだと思う」
「……（ジー）」
そう話してる最中ムッツリーニは外で何かに気付き外を見ていた
「？どうしたのさムッツリーニ、何かあった？」
「……知らない制服」
ムッツリーニが見ていたのは文月学園とは違う高校の制服を来た生徒が校門をくぐる姿だった
「…あの制服、どこのだろう」
「ウチらの近くの高校じゃなさそうだけど…」
そこに鉄人が来る
「よしお前ら、今から体育館に来い。遅刻はするなよ」
「おいちょっとまて鉄…西村先生」

「坂本、半分言ってるぞ」
「俺たちに一体何をさせるんですか？Ａクラスの奴等が行くのは分かるが、わざわざＦクラスの俺らが行くってのは…」
「坂本、”Ｆクラスだから”だ」
「ちょっと待ってよ鉄人！」
「吉井、お前はやっぱり補習室に行くか」
「ま、待ってください！…僕らがあの人たちと戦えと？」
「吉井にしては頭の回転が早いな。あぁ、その通りだ」
試召システムって、話を聞く限りだと文月学園以外には無いって話じゃなかったかなぁ…「吉井、お前の頭で何を考えてるが知らんが」なんか馬鹿にされた気分
「今回の戦いも負けたら補習室行きだからな」
…は？
「ちょっとまってよ西村先生！」
「なんだ吉井…俺も暇じゃないんだが」
「その戦いは僕らに取ってはリスクしかないじゃないか！なんでそんなものに…！」
「いや、メリットもある。お前達が勝ったらクラスの設備の一段階昇格、それとこの”青銅の腕輪”のプレゼントだ」
はて、青銅の腕輪？なんかうさんくさいな。そこに雄二が口をはさむ
「でも先生、その腕輪はＡクラスの奴等がもらっても得するんすか？」
雄二の疑問はもっともだった。４００点を越えた人たちに渡される腕輪は僕たちＦクラスには点数を取らなくてももらえる便利ものだが、Ａクラスの人は大概持ってるから、メリットが無くなるし、設備ももうこれ以上よくならない。だがその後付け加えられた内容は
「あと、半年の間、試召戦争を相手側から仕掛けられなくなる。要するにこちらから攻めない限りは戦いは起こらなくなるって事だ」
その言葉に雄二が反応する。それもそうだ、僕らＦクラスは打倒Ａクラスを目標にしてるから、他クラスに攻められて戦力を削がれる

のは避けたい筈だ。だがそれだとAクラスも攻められなくなる…
「…西村先生、私たちAクラスは今回の戦いに勝ったらFクラスと試召戦争がしたい」
そこでこのような発言をしたのは霧島さんだった。他しか霧島さんはAクラス代表だから決定権はあるだろうけど、Aクラスには僕らに勝ってもなにもメリットが…
「いいのか翔子、俺らに負けても知らねぇぞ？」
「…うん。でも私たちが勝ったら雄二、今度は覚悟してもらうから」
前言撤回。霧島さんに取ってはメリットだらけだ。
「…」
「仕方ねぇ、やるしかねぇか…」
おい雄二、目が泳いでるぞ。
「でもそれだけメリットがあるなら参加するはありそうじゃな」
「そうだね、ウチは数学でも腕輪貰える程の点数は期待できないから、腕輪欲しいかな」
「……保体なら負けない」
「よし、そうと決まったら早く体育館に来い。相手がお待ちかねだ」

第2問

バカテスト～生物
生物の生態系五種を答えよ

工藤愛子の答え
「哺乳類、鳥類、爬虫類、魚介類、両生類」
先生のコメント
正解です。

土屋康太の答え
「ヒト、カラス、トカゲ、マグロ、カエル」
先生のコメント
言ってることは間違ってはいないのですが、ここでは生態系の種類を聞いてるので間違いとなります。

島田美波の答え
「私、葉月、お母さん、お父さん、お爺ちゃん」
先生のコメント
島田さんの家の家族構成は聞いていませんよ。ですがまさかの結果がありまして…

吉井明久の答え
「僕、姉さん、父さん、母さん」
先生のコメント
ここにももう一人同じ思考回路が居るとは思いませんでした。ちなみに吉井君、五つ答えなければいけない問題ですよ。

「「…なぁ鉄人」」
「吉井に坂本、ハモりながら鉄人と呼ぶな、気持ち悪い」
「それにしたって、なんで急に他校と試合するんだ。相手校にメリットがあるのか？」
「分からん。とりあえずお前たちを相手は指定してきたんだ、俺が知ってるわけもないだろう」
「なぁ雄二、やっぱり変だよね？どうして僕らなのかが分からないままだよ」
正直僕は行く気にはなれない。Aクラスと一緒にいても足を引っ張るだけだし、何より面倒くさい
「…」
雄二は黙り込んでいる。多分僕と同じ事を考えていると思う
「雄二に明久よ、もうぶつくさ言うでない。ここまで来たのだからもうやるしかないであろう？」
その話に秀吉が割って入る。多分秀吉は楽しみなのだろう。そして話ながら体育館についたが、まだ僕らFクラスの人間しか居なかった
「あれ？霧島さん達は？」
「……すぐ来る」
「ムッツリーニの言う通りじゃな、姉上が遅れて来るわけないのじゃ」
「…おまたせ」
噂をすればなんとやら、Aクラスの霧島さん、木下優子さん、工藤さん、久保くんが来た。
「じゃあ後は相手を待つだけだね？」
「吉井君、君は相手が誰かは聞かされてないの？」
ボーイッシュだけどちょっとHな工藤さんが僕にそれを聞いて来た。
その話は鉄人に聞いたら早いんだけど、鉄人は足早に補習室にもどっていったようだ
「ん～…僕らも知らないんだ」
「へ～…」

「何で私も呼ばれたのかしら、愚弟がいるなら私は必要ないんじゃ…」
「まぁまぁ優子、文句言わないの♪久しぶりに弟君と共演なんて、恥ずかしいから隠したいもんね？」
「なっ…！愛子！そんな訳ないじゃない！」
そういったツンデレぶりを発揮してるのは秀吉のお姉さん、木下優子さんだ。やっぱり瓜二つで油断したら逆を呼んでしまいそうだ。そして秀吉は元より優子さんも美少女だ。木下家って華があるよなぁ…
「……来た」
するとムッツリーニが気配を察知した。どうやら相手のおでましのようだ
「よし、しっかり相手の顔を拝んでおこうじゃねーか！」
そして現れたのは…
「…初めまして、だな。俺が暁学園3年、代表の烈火だ。よろしく頼む」
相手も僕らと同じ人数で来たようで、鉢巻きをつけた奴がどうやら代表らしい。暁学園…僕は聞いたことないなぁ
「ねぇ雄二、暁学園ってどこにあるの？」
「んなもん俺が知るか。最低でもここらへんの学校じゃねぇな」
するとその鉢巻きの男の隣に居た女の子が僕らを指差し
「貴殿方が吉井明久さんに坂本雄二さんですか～、やっぱり中々格好いいです～♪」
そう口走る。え、俺らって雄二も格好いいの？何か同じレベルの扱われ方で正直心外だな
「そういう君の名は？」
「あ、私は光瑠璃です♪よろしくお願いしますっ♪」
丁寧に深々とお辞儀をする光さん。いやぁ…可愛いなぁ
「「…（ピクッ）」」
おっと、何か僕らの女の子の中の二人（美波と姫路さん）のオーラ

が変わったぞ！？
「…私、霧島翔子」
「ボクは工藤愛子、よろしくね？」
そして大体の自己紹介が済み、相手の代表、烈火瑠奈君が本題を切り出してきた。こっちの代表は何故か俺になっている
「では吉井君、ルールなんだが、基本的には勝ち抜けの試召対決になる。科目選択は基本的に前回の対決で負けた側が選択するって事にする。そして特別ルールとして両者一名のみ戦死寸前で引っ込め、補充試験を受けられるシステムだ。その試験は一時間。一時間後の次の対決に強制参加、最後の生き残りの奴がこのルールは使えない、そして召喚者が降伏、召喚獣が戦死で次の奴と交代、全員を負かせたチームの勝ち…以上だが理解できたか？」
…相手の僕のイメージ、まさか馬鹿で通ってないか？まぁいいけど、とりあえずルールは理解した。それを皆に伝えて
「雄二、作戦はどうする？」
雄二に話を振る。こういうときは雄二は頼りになるからなぁ
「相手のレベルが分からない以上、こっちの戦力をいきなり消耗させるわけには行かない。先陣は須川、お前に行ってもらう」
…雄二、須川君を捨て駒にしてるようにしか見えないよ
「分かった、なんとかしてみるよ」
「その後のならびは随時話す。…皆、絶対に勝つぞ！」
「「おーっ！」」
そして「文月学園ｖｓ暁学園試召戦争」が幕を開けたのだった…。

まず先陣として須川君が召喚フィールドに入る。相手は風野って男の人だ。科目は僕らに選択権があったから、まずは現文になった
「よし、須川とやら！お手柔らかに頼むぜぇ！」
相手の威勢のいい声。中々手強そうだ
「２‐Ｆ須川亮が試召対決をしかけます！サモン！」
そして両者の召喚獣が現れ、点数が表示された

文月学園　須川亮
現文　８７点
対
暁学園　風野真人
現文　２２５点

須川君、君の死は無駄にはしないよ。
戦力差が歴然で須川君は一瞬で負けてしまった。これからの戦い、本気にならないとまずいな…。

結果
文月学園　須川亮
現文　０点　戦死
対
暁学園　風野真人
現文　２２２点

第3問

バカテスト～英語

次の日本語を英語に直せ

「あなたは誰ですか」

霧島翔子の答え

「Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？」

先生のコメント

さすがに簡単ですよね、正解です。これくらいの問題は皆さんに解いてもらいたいですね。

木下秀吉の答え

「Ｗｈｏ　ｉｓ　ｙｏｕ？」

先生のコメント

この場合Ｂｅ動詞はａｒｅを使うので間違いです

島田美波の答え

「Ｗｈｏ　ａｍ　Ｉ？」

先生のコメント

記憶喪失になってますよ

「…うぅ…ごめん…」

「須川君、仕方ないよ…」

暁学園の風野君に一瞬で敗れた須川君。さて、雄二はここでどう動く？

「……」

雄二が黙り込み、難しい顔をしている。多分次に誰を送るか悩んでいるんだろう。
「明久」
「ん、何だい雄二？」
「次はお前が行け、科目は日本史、お前の得意科目だ」
次に指名されたのは僕だった。雄二は僕にも戦死勧告をするつもり…でもなさそうだ。雄二のまっすぐな目を見る限り、何か考えがあるんだろう
「分かったよ雄二、頑張ってくる」
「ああ、期待してるぜ馬鹿野郎！」
「明久よ、お主には期待しておるぞ」
「……頑張れ」
「ウチらの出番を無くしてくれても良いんだからね、アキ！」
「明久くん、無理はしないで下さいね？」
「皆…、僕、頑張るよ！」
そして僕が召喚フィールドに入る。相手は先程と同様に風野君。相手の召喚獣は西洋の甲冑に鉄剣といったシンプルなものだったが、相手の点数を見る限り油断は出来ない！
「お前があの吉井か！」
「うん、そっちでも僕は知られてるのかな？」
「あぁ、学校一の大馬鹿だってな」
おい誰だ、こんな情報を流したのは
「よし、じゃあ始めようぜ…サモンだ！」
「サモン！」
そして僕の召喚獣も現れる。相変わらずの改造制服の背中に龍の刺繍、そして木刀というチンピラ装備、果たして勝てるか？
そして点数が表示される…

文月学園　吉井明久
日本史　１５２点

対
暁学園　風野真人
日本史　１４３点

相手も消して低い点数じゃないけど、これなら勝てる！僕の召喚獣を飛び上がらせる、それに反応し相手の召喚獣は防御体制を取るが…
「やらせるかよ！お前の木刀じゃ剣を折ることは…」
「だあああああっ！」
相手の剣に突っ込むのでは無く、相手の目の前で着地し、相手の鎧の隙間に木刀を突いた。
「……なっ！！」
「どうだっ！」

文月学園　吉井明久
日本史　１３４点
対
暁学園　風野真人
日本史　７５点

よし、このまま行けばやれる！僕はさらに木刀で相手に攻めかかる。
相手はさっきの一撃でよろめいていたのでさほど苦労はしなかった。
そして
「とどめだぁぁ！」
渾身の一太刀が相手に入る。よし、勝った！

文月学園　吉井明久
日本史　９８点
対
暁学園　風野真人
日本史　０点　戦死

「よっしゃぁ！」
僕が意気揚々と帰ってくると、Ｆクラスの仲間が囲んでくれる。そこに雄二もやってきて
「明久、次も頼むぜ？」
「おぅ、任せてくれ！」
そしてここから僕の快進撃が始まる。ここで僕は怒濤の５連勝を飾る。そして僕の点数がそこをついた頃で
「明久、お前の出番はひとまずここで終わりだ。補充をしてこい」
雄二の指示が飛ぶ。多分僕が補充するのは日本史だろう
「よし、翔子、頼む」
そして次に指名したのは霧島さんだった。雄二はここで勝負を決めるつもりなのだろうか？
「…うん、頑張る」
「代表！Ａクラス首席の実力、相手に見せて下さい！」
「これならボクらの出る幕なさそうだね～」
そして召喚フィールドに霧島さんと暁学園の次席、零冬児って男が入った。科目は数学。霧島さんなら大丈夫だろう
「…負けてもらうから」
「…ふん、サモン」
そして二人の召喚獣が現れ、点数が表示される…

文月学園　霧島翔子
数学　３４５点
対
暁学園　零冬児
数学　３４４点

この点数に周りがざわめく。霧島さんの点数が高いのは言わずもがなだけど、相手の零君の点数が霧島さんと一点差なんて…このままじゃ例え霧島さんでも危ないんじゃ…
僕の悪い予感は当たってしまった。相手の装備は自衛隊が着るような迷彩服にライフルの様な銃。一方の霧島さんは武者の格好に刀。…霧島さんは為す術も無かった。その銃に撃ち抜かれ、一太刀も浴びせられず敗れてしまった

文月学園　霧島翔子
数学　０点　戦死
対
暁学園　零冬児
数学　３４４点

そしてその後僕らは勢いを失い、清水さん、工藤さん、久保くん、木下優子さんが敗れ、残ったのは僕らはＦクラスの仲間しかいなくなってしまった

「…くそっ、あいつは化け物かっ！」
雄二が唇を咬み苛立ちを露にする。それもそのはず、もう既に相手は６人、こちらも６人失っていたのだ。しかも失ったのはＡクラスの人ばかり。僕らの戦力低下は目に見えていた
「どうしたらいいんだ、どうしたら…」
「明久が召喚獣の扱いに慣れておるとはいえ、相手も手慣れじゃ。こちらに太刀打ち出来るのかのう…」
「僕も同感だな。正直勝ち目が一気に減ったよね」
僕の補充テストが終わり、本来なら僕が出なきゃ行けない所なんだけど、相手との合意で強制参加のルールが消えたから、今皆で作戦会議を行っている所だ
とりあえず今残ってる僕らと、相手をリストアップすると…

文月学園　暁学園
吉井明久　烈火瑠奈
坂本雄二　光瑠璃
木下秀吉　零冬児
土屋康太　双葉陽子
島田美波　天鳳院琉姫
姫路瑞希　灼沢紗菜

「…正直な話、ここで姫路を出して戦局を打開したいんだが、姫路が何処かで負けるとこちらはつらくなる。相手の戦力も分からないしな」
「でも姫路さん以外で今あの零君を倒せる人は…」
「……俺が行く」
そう言い出したのはムッツリーニ。そうか、まだ保健体育がある。保健体育なら右に出る奴は居ないはずだ！
「明久よ考えてみよ、何故今まで雄二はムッツリーニを出さなかったのじゃ？」
あ、そういえばそうだ。だけど雄二はAクラスの皆を先に出したんだ、何か考えがあるのかな？
「秀吉の言う通り、ムッツリーニももう少し取っておきたかった。こっちにはムッツリーニ、姫路、明久の様に能力特化してる奴がいる。そこまで行けば戦死覚悟の各個撃破をしようとしてたんだが…」
正直そういう状況じゃない、と言うのは皆が分かっている。だからムッツリーニも名乗り出たんだ
「雄二よ、ムッツリーニに任せてみようぞ。ムッツリーニは腕輪もある。簡単にはやられまいて」
「……簡単には負けてやらない（グッ）」
ムッツリーニが力強く拳をつきだす。期待できそうだ
「よし…次はムッツリーニだ。しっかり頼むぞ！」
雄二の怒号が響き、ムッツリーニがフィールドへ…！

その後、疲弊した零君は精彩を欠いていたようでムッツリーニの早さの前に倒れたのだった

文月学園　土屋康太
保体　６５２点
対
暁学園　零冬児
保体　０点　戦死

第４問

バカテスト～日本史

関ヶ原の戦いで勝った東軍の大将、および敗れた西軍の大将の名を答えなさい。

吉井明久の答え
「東軍…徳川家康
　西軍…石田三成」
先生のコメント
君がしっかり正解を導き出したことに先生は感激で涙が止まりません。大正解です。

木下秀吉の答え
「東軍、石田三成
　西軍、徳川家康
先生のコメント
ちゃんと見直しはしましたか？石田三成は西軍、徳川家康は東軍の大将なので間違いです。ですが吉井君といい、Ｆクラスの成績が伸びていることが先生は嬉しいです。次回はケアレスミスをしないようにしましょうね。

島田美波の答え
「東軍…東ドイツ
　西軍…西ドイツ」
先生のコメント
…関ヶ原の戦いは日本でおこなわれました…

「…次は私ね、お兄ちゃん！」
ムッツリーニが相手の次席、零君を倒してくれたおかげで相手の人数が減り、次は灼沢さんって女の子が出てきた。ムッツリーニの保体の点数を見てるから相手は多分科目を変えてくると思うから、ムッツリーニはここで戦死に…
「暁学園、灼沢紗菜は文月学園、土屋康太に保健体育で勝負を挑みます！」
な、ななな、何ぃぃ！？相手は何を血迷って保体を選んだ！？ムッツリーニの点数は６００点越え。その点数に勝てるわけがない！
「ムッツリーニ、勝てるよ！サクッと終わらせて！」
「……言われずとも…サモン！」
「サモンッ！」
そしてお互いの召喚獣と点数が姿を現す…

文月学園　土屋康太
保体　６１８点
対
暁学園　灼沢紗菜
保体　１６９点

相手のあの点数ならＢクラスレベル、だけどムッツリーニはその四倍以上の点数がある。大丈夫だ！
「大島先生、ちょっとタイムだ」
だがここで雄二が先生にタイムを入れ、僕ら（僕、ムッツリーニ、秀吉、美波、姫路さん）を集める。…雄二が難しい表情をしてるって事は多分良くない話なんだろうけど、一体何がまずいんだろうか？
「なぁ雄二、一体何が引っ掛かるのさ？点数の差は歴然じゃないか

？」
「むしろそれに違和感を覚えるだろ…全く、明久はつくづくバカだな」
…最近けなされてもスルーするようになった自分がなんか悲しい
「いいか、相手はさっきムッツリーニの点数を見た上でまた保健体育の勝負を仕掛けてきた。表面だけを見るならどう考えても勝てる要素はない」
「だからなんじゃと言うんじゃ？ワシには全く分からんのじゃが…」
「相手には保健体育でムッツリーニに勝つ要素があって、あの灼沢って女を出したって言うことになる」
「でもその勝つ手段って？ウチらじゃ土屋相手じゃどうしようもないのに…」
「多分相手の召喚獣の武器…薙刀に何か細工があるんだろう」
相手の子…灼沢さんの召喚獣を見ると、武器は薙刀、格好はセーラー服と言うちぐはぐな装備だった。確かに相手の装備を見ると何か変かも
「ムッツリーニ、あまり長期戦はまずい。一撃で決めてくれ」
「……了解した（グッ）」
そしてタイムが終わり、再びムッツリーニが召喚フィールドに入る
「君が土屋君か…中々出来そうだけど、あたしに勝てるかなぁっ！」
その声に合わせ、相手の召喚獣が突っ込んでくる。薙刀である以上相手は武士、ムッツリーニは上忍だ。そう簡単にあたるわけが…

ゴッ

「……っ！！」
「まず、一撃ぃ…」

文月学園　土屋康太

保体　５６２点
対
暁学園　灼沢紗菜
保体　１３２点

ゴッ、ゴッ…！

予想外だった、相手は薙刀を振り払い、ムッツリーニが避けた所に次々と体当たりをかましてくる。確かにこれなら相手が回避中だから確実に点数を減らせるけど…まだ相手の真の狙いが分からない、相手は何がしたいんだ？

文月学園　土屋康太
保体　４０２点
対
暁学園　灼沢紗菜
保体　８点

相手の体当たりが何回も続き、相手は確実に次の一撃で倒れる。だが灼沢さんの顔は笑ってる…ムッツリーニ、頑張れ！
「土屋君頑張るねぇ？」
「……君、後一撃で終わる。……決めさせてもらう！……”加速”」
ムッツリーニが腕輪を使うためのキーワードを口にし、召喚獣の速度を極限までに高め、一気に勝負に出た！だけど…
「待ってたよ、この時をっ！」
「……！！」
ムッツリーニの一撃は確実に相手に入った。絶対に戦死だ。だけど、まさか…カウンター！？

文月学園　土屋康太
保体　０点　戦死
対
暁学園　灼沢紗菜
保体　０点　戦死

あの戦力差を、覆す。この行為はとても難しい。僕は観察処分者で人より召喚獣の扱いがうまいって言っても保体じゃムッツリーニには敵わない。だがその行為を相手、灼沢さんはやって見せたんだ
「……ごめん…」
「…いや、よくやったムッツリーニ。だが…ちっ、やっぱり相手は勝ちの算段があったか…！」
雄二が苛立つ。相手の行動が読みきれなかったからムッツリーニを戦死させてしまったことに負い目を感じてるんだろう
「じゃあ坂本、次はウチが出るね！選択権はこっちにあるし、数学で一人、倒してくるよ！」
そう意気揚々飛び出したのはポニーテールが可愛い美波だ。数学…確かに美波は得意だけど、さっきの戦いがあったから正直安心できないな…

その不安が的中。美波は相手の子、双葉さんって人にやられちゃった。こっちは秀吉が古典で勝負を挑んで二葉さんを倒し、天鳳院さんが日本史で秀吉にいどんだけど秀吉が返り討ちに成功。これで残ってるのは…
文月学園　暁学園
戦闘者　　戦闘者
木下秀吉　重山飛鳥
控え　　控え
吉井明久　烈火瑠奈

坂本雄二　光瑠璃
姫路瑞希

ふむ、相手は三人、こっちは秀吉の奮闘で四人。人数的には有利だけど、気を引き締めなくちゃ！
フィールド上には勝ち残りの秀吉と相手の重山さんが入った。

「…木下だな」
「うむ、お主は重山と申すものじゃな。よい勝負をしようではないか」
「…私は守護騎士。負けるわけには行かない！サモン！」
「サモンじゃ！！」

文月学園　木下秀吉
古典　１３４点
対
暁学園　重山飛鳥
古典　５２１点

「なんじゃと！？」
「何だよ、あの点数！」
「まずいっ…まだ高い奴が居たって言うのか！」
秀吉…っ！頑張って…！

第5問

バカテスト…数学

サイコロを二回振り、足した合計が7になる確率はいくらか

島田美波の答え
「7になるのは全部で六通りなので、答えは6分の1」
先生のコメント
正解です

坂本雄二の答え
「6分の1」
先生のコメント
正解です。坂本君も最近大分成績が伸びてきましたね

吉井明久の答え
「たまになる」
先生のコメント
せっかく皆さんがちゃんと答えてくれたのに台無しですよ

「ほぉっ！やぁっ！」
「…はっ！」
フィールド内では秀吉対重山の戦いが行われていた

「…相手の奴、今まで何処に居たんだよ！名簿にも乗ってなかったじゃないか、雄二！」

「だが明久、今現にあいつがいるって事は事実。そして…」
雄二がもう一度名簿を見せると…
「…！そうか、補充試験！」
「そういう事だ。どうりでさっきから一人足りないとは思っていたが…でも限られた時間の中であれだけ点数をとる奴なら、翔子でも厳しかったかもな」
雄二の言うことはもっともだ。霧島さんはあの零君って次席の人に負けてるんだから、この重山さんって人に勝てるかどうかも分からない。秀吉…君が好きな古典でも若干無茶だよ…

そうこうしてる内にフィールド内での戦いが進行していく。秀吉は重山相手に苦戦の一歩を辿っていた

文月学園　木下秀吉
古典　８４点
対
暁学園　重山飛鳥
古典　２４１点

…あれ？秀吉が押されてる割には相手の点数も削られてる？
「チャンスだ秀吉！相手は召喚獣の扱いに慣れてない！畳み掛けろ！」
…そうか！いくら相手の召喚獣が強くても、僕らの方が慣れがあるから強いのか！これなら…勝てる！
「頑張れ秀吉！」
「木下、頑張ってぇ！」
沢山応援に後押しされ、秀吉の召喚獣が少しずつ体勢を立て直してきている様だ
「お主には負けるわけには行かぬのじゃぁっ！」

「っ！！」
そして渾身の一撃が相手に入る。よし…！

文月学園　木下秀吉
古典　０点　戦死
対
暁学園　重山飛鳥
古典　６５点

…嘘でしょ？秀吉の刀の一振りは確かに相手に決まった、なのに相手の召喚獣が立ち上がっているどころか、秀吉の召喚獣が戦死している。一体今何が…

「…なぜじゃ！何故今の一撃を食らって、何故立っていられるのじゃ！」
「簡単だ。お前の刀をいなし、カウンターで決めた。それが私の戦い方だ」
またカウンター！？しかも相手の武器は素手。それでカウンターって…化け物か！？
「…ワシの…敗けじゃ…」
秀吉が悔しそうにこちらに戻ってくる。実際誰が見ても秀吉が勝ったと思っただろうからね。
「すまぬ、明久、雄二、姫路。もう少しワシが頑張れば楽できただろうに…」
「木下君はよく頑張りました。相手の古典の点数はもう厳しいですし、もう一度同じ科目で行けば勝てます♪」
落ち込んでる秀吉を慰める姫路さん。そうだ、まだ戦いが終わった訳じゃない。まだこっちには三人居るんだ。各個撃破で勝てる！
「そうだよ秀吉！よく二人も倒してくれたよ、これでこっちは大分

楽になったんだから、元気出さなきゃ！」
「…そうじゃな、明久よ。お主ら、頼むぞ！」
そして次の試合、こちらは姫路さんを送り出した。まぁ、「古典以外の点数も高いだろうから、明久と俺は戦力外でとにかく姫路に出てもらうしかない」って言う感じで雄二が送り出したんだよね。まぁ、姫路さんの学力も高いから負けることは無いと思うけど…
「姫路ぃ！分かってるとは思うが、お前が最後の砦だぁ！頼む、ここで残り三人をのしてくれ！！」
僕も戦力外…まぁ、無理もないけど
「そうだよ姫路さん！僕らの点数じゃ勝ち目はない！」
「は、はい！頑張ります！」
そう言い残しフィールドに向かう姫路さん。ここで負けると2対3…不利は避けられない！
「文月学園姫路瑞希、現文での勝負を申し込みます！サモン！」
「サモン！」

文月学園　姫路瑞希
現文　４６７点
対
暁学園　重山飛鳥
現文　３１５点

「…おのれぇぇっ！」
「私は…負けられないんですっ！！」
相手が点数を見て不利を悟ったか、自滅覚悟の突撃を行う。だけど姫路さんの召喚獣は丁寧にあしらい、重い一撃で仕留めた

文月学園　姫路瑞希
現文　３９８点
対

暁学園　重山飛鳥
現文　０点　戦死

「やったね姫路さん！」
「はい！これで少しは明久君達も楽になりますね♪」
重山さんを倒したとこで相手の大将、烈火君が「タイムだ」と要求してきたので姫路さんも一時フィールドからでて僕らど談笑していた
「さすが瑞希！強いわね～！」
「あの点数はやはりＡクラスレベルじゃの！脱帽じゃ！」
「……お見事」
「このままなら残り二人も姫路さんで勝てるね！」
「だと、いいがな」
「む、なんだよ雄二。まるで次姫路さんが負けるみたいな言い方は！」
「多分次は光って女が出てくるんだろうが、正直残り二人はポンコツな訳がない。それに姫路は現文を削られてる。さすがに二人は凌ぎきれんだろ」
「…わ、私は頑張りますよ？そりゃぁ、私が倒すに越したことは無いんですし…」
戦う意思を見せる姫路さんを雄二はなだめるように
「肩に力を入れすぎんなよ姫路。まだ後ろには俺も、明久もいる。お前が負けてもまだ決着が着いた訳じゃない。それを忘れんなよ」
「…はい！」
「じゃあ、皆円陣を組もう！…このまま一気に勝つよーっ！」
「「おーーっ！」」

「…相手の士気は大分高いみたいだな、瑠璃」
「は、はい！これなら私たちの苦戦はやむ無しかなぁと…」
「瑠璃…無理すんなよ！まだ俺も居るからな」
「はい！…でも、瑠奈さんに必要とされる事で、私も頑張れたから

…」

「…あぁ、期待してるぜ、瑠璃！」

「…はい！」

第6問

バカテスト～化学

水を電気分解したときにできる元素を書け

島田美波の答え
「水素、酸素」
先生のコメント
正解です。水はＨ２Ｏですから、それを分解するとＨ２とＯ２が残ります。

吉井明久の答え
「水、電気」
先生のコメント
水が分離してませんし、電気が生まれるわけもありません。問題にある文字を引用しても答えは出てきませんよ。

姫路瑞希の答え
「お酢」
先生のコメント
…。

「「サモンっ」」
とうとう残った人数は文月学園は3人、暁学園が2人となって、今の戦い姫路瑞希対光瑠璃となっている。
正直、姫路さんが負けるとは思えない。でも相手の光さんも弱いと

も思えない。…なんだろう、さっきからなんで僕は弱気なんだ？しっかりしろ、僕！姫路さんは強い！

文月学園　姫路瑞希
現文　３２５点
対
暁学園副将　光瑠璃
現文　５１７点

「…っ！」
「私はこれでも暁学園の副将…勉強してるんですよ☆」
僕らにとっては不覚だった。いくら副将とはいえ、僕らのクラスのトップの姫路さんを凌ぐ点数の人が居るとは思ってなかった…

「姫路ぃ！」
そう叫ぶのは雄二だった。…何を伝えたいんだ？
「は、はい！何ですか、坂本くん」
「棄権をしろ、姫路。お前はもう充分よくやった」
…は？こいつは何を言ってるんだ。今姫路さんが負ければ僕らが勝つ可能性は極端に下がる。それを分かってるのかよ
「雄二！今この状況で姫路さんをさげるなんて…」
「明久、どの道姫路がここで勝っても次は確実にやられる。それに…作戦もある」
作戦…神童と昔は言われていた雄二はそういう作戦を考えるのは確かに得意だが…
「いや、坂本君。私行きます」
姫路さんは雄二の意に背き、戦いに身を投じた。…まぁ、それが最善だと思うよ

「じゃあ、お手柔らかにお願いしますね、姫路さん？」
すると相手の召喚獣は大きなぴこぴこハンマーを持って突っ込んできた。姫路さんはその動きに合わせて横に飛び、大きな剣を薙ぎ払う
「やぁぁぁっ！」
「ええぇぇいっ！」
剣がハンマーと鍔迫り合いを繰り広げる。点数を考えると相手の光さんの方が優位だと思うんだけど…
「やぁっ！」
「！？」
鍔迫り合いに勝ったのは姫路さんだった。相手は召喚獣の扱いに不馴れなのかな…

文月学園　姫路瑞希
現文　２８９点
対
暁学園副将　光瑠璃
現文　３６１点

長時間に渡りこのような戦いが続き、光さんと姫路さんの点数差が少なくなっていった。…それにしても、姫路さんも光さんも可愛いなぁ…一生懸命な所が特に

「明久、何を考えてる。ニヤニヤするな、気持ち悪い」
「…な、何だよ雄二。僕が何を考えてようが勝手だろ！」
「まぁ確かに勝手ではあるが、いきなりニヤニヤされるとさすがに気持ち悪いわ…」
「うるさい！何だっていいだろ！」
「…とにかく明久、今この状況が良いように見えるか？」
状況？点数の話かな…

文月学園　姫路瑞希
現文　１９９点
対
暁学園副将　光瑠璃
現文　２０８点

差はさらに詰まってるし、フィールドを見ても姫路さんが守りに入ってる光さんを圧倒してる様に見えるんだけど…
「今この状況のどこに心配する要素があるのさ？」
「全く…明久、ニヤニヤしながら妄想する暇があったら現状をもっと考えてくれ」
「…で、何が言いたいのさ、雄二？正直僕には何が問題か分からないんだけど…」
「簡単だ明久。姫路の武器を見てみろ」
姫路さんの武器？僕は雄二さんの言葉に従って姫路さんの武器を見てみた。するとどうしたことか、姫路さんの大剣は刃こぼれでボロボロになっていた。そして姫路さんの表情も冴えない。もしかして…押してるように見えたのは”がむしゃらに攻めざるを得なかった”から…？
「…もしかして、やばい？」
「あぁ、やばいだろうな。相手の方が強いから姫路は下手に守りに入れないから攻めようとする。相手からすると守ってチャンスを見計らうだけでいいんだ。」「な、なら、姫路さんにその事を伝えなきゃ…」
「無理だな。今口頭で言ってしまえば相手が仕掛けてきて姫路は一貫の終わり。言わなくてもいずれ終わるな」
「くっ…どうしようもないのか？」
そしてとうとう姫路さんの武器は相手の防御の前にまっぷたつに折れてしまった。くっ、思ったより早いなぁ…

文月学園　姫路瑞希
現文　１４２点
対
暁学園副将　光瑠璃
現文　１９４点

まずい！今ので姫路さんが俄然不利になった！
「…さすがですね、光さん。私じゃ勝ちきれませんでした」
「え？姫路さん、まだ戦いは終わってないですよぉ？」
そう言い、相手の光さんはさらに姫路さんにハンマーを降り下ろす。だけど姫路さんはそれを懸命にかわす。くそ、タイマンじゃなかったら…！
「ですけど…私だってまだ負けられないんです！」
すると姫路さんの召喚獣は自分の折れた剣で最後の猛攻に出る！
「やぁぁあっ！」
「…もらったぁぁっ！」
そして二人が交錯。…どっちが勝ったんだ！？

文月学園　姫路瑞希
現文　０点　戦死
対
暁学園　光瑠璃
現文　１０３点

最後の一撃はどうやら光さんのハンマーだったらしい。姫路さん、よく頑張ったよ！
そしてフィールドを抜け落ち込んだ様子の姫路さんを僕らで囲む
「よくやった姫路！ここまで出来れば充分だ！」
「…でも、もう少し頑張れば倒せたのに…」
「やむを得んぞ、姫路。あの状態じゃ、例え姫路の召喚獣が強くて

も勝てまいて。むしろ善戦した方じゃぞ」
「……俺たちよりも、活躍してる……」
「皆の言う通りだよ、姫路さん！もっと胸を張ってよ！後は僕と雄二が頑張るから！」
「…はい！明久君、坂本君…頑張ってくださいね！」
そして姫路さんとハイタッチをかわす僕らFクラスの仲間達。そうだ、弱気になってる場合なんかじゃない。僕らにはチームワークがある、これがあれば…勝てる！

そしてとうとう副将戦、相手は先程同様光さん。たいしてこっちは雄二が出ることになった。さっきの戦いで光さんの現文の点数はかなり削れてる。普通なら現文で行くはずだけど…雄二の事だ。どうせ別の科目で行くんだろうな
「文月学園副将の坂本雄二だ。よろしくな、お嬢さん？」
「こちらこそ宜しくお願いしますね、坂本さん♪」
二人が一礼をかわす。雄二も言葉遣いを気を付ければ真面目な人間なんだよなぁ

「…文月学園副将坂本雄二、数学で試験召喚対決を申し込む！」
「数学…ですか？何で先程私が消費した現文で挑んでこないんですか？」
「俺自身あまり現文で点数を稼げてないんでね…数学で挑むしかなかったんだよ」
雄二はそう言っていたが、やはり付き合いが長いせいか僕には分かるたぶん雄二は相手が文系と踏んだ。現文が点数が取れてないことが事実だったとしても、雄二は文系理系共にそこそこ点数が取れる。だから相手が理系は苦手だと踏んで数学をチョイス…か。僕じゃ出来ない作戦だな
「…なら、私は勝ち目が無いかもしれませんね？」
そういい舌を出す光さん。か、可愛い…

「どういうことだ？」
「だって私…理系、特に数学は苦手ですから♪サモンっ」
「サモン！！」
そして召喚獣と点数が表示される。だがここで驚愕の事実が…！

文月学園副将　坂本雄二
数学　１４７点
対
暁学園副将　光瑠璃
数学　８点

「…８点？」
「えへ、私、本当に数学は大の苦手なんですもん～♪」
可愛い仕草で慌てる光さん。ま、まさか…僕と同じレベル、いや、
それより低いよね
そして瞬く間に雄二が光さんをねじ伏せた。…なんか容赦無いなぁ…

文月学園副将　坂本雄二
数学　１４７点
対
暁学園副将　光瑠璃
数学　０点　戦死

第7問

バカテスト～国語
次の漢字の読みを平仮名で答えよ
『薔薇』

姫路瑞希の答え
「ばら」
先生のコメント
正解です。かなり難しい漢字ですが、読めるだけではなく書けるようにもなりましょう。

吉井明久の答え
「バラ」
先生のコメント
ちゃんと問題文を読みましょう。平仮名で回答しなきゃダメなんですよ？ですがよく読めました。先生はうれしいです。

島田美波の答え
「こんなのを問題にするなんて、先生のいじわる！」
先生のコメント
解答欄に愚痴るのがドイツの流儀って話は私は聞いたことがありません。

「よし、まずは1勝！」
「雄二…女の子に対して容赦がなさすぎるよ…」
「何を言ってるんだ明久。やらなきゃやられる、それが試召対決だ」
雄二は数学が8点の光さんを倒し、残る敵は暁学園大将の烈火って人のみになったんだけど、僕的にはもうちょっと容赦してもいいん

じゃないかなあと思ってしまった
「まあ、とにかくあとは大将だけだね！」
「明久の手を煩わせる必要もないだろ。けりをつけさせてもらうぜ」
「そこまで言うんなら頼むよ、雄二！」
そして既に召喚フィールドに入っていた烈火と雄二が対峙した。雄二の言った通りここを勝てば僕が出る必要もなくなる。頼むよ雄二！
「お前が暁学園とやらの大将さんか」
「いかにも。俺が暁学園の大将、烈火瑠奈と言うものだ！」
「悪いな、烈火とやら。お前の出番もここで終わり、そして俺らの勝ちでこの模擬戦は終わる」
「ほう…どうやら随分な自信の持ち主のようだな…坂本とやら。だが大将である以上、俺も負けられない！暁学園、烈火瑠奈！文月学園坂本雄二に社会で試験召喚対決を申し込む！」
「「サモン！！」」
二人の掛け声に合わせて二人の召喚獣が現れる。…どうだ！？

文月学園副将　坂本雄二
社会　１９７点
対
暁学園大将　烈火瑠奈
社会　２６８点

「どうやら、坂本の苦戦は免れぬようじゃのう…」
秀吉の言った通り、相手と雄二の点数差には大分差があった。武器も雄二は素手、相手は真剣…。だが、雄二も簡単にやられる奴じゃない！
「どうした大将！ビビって動けないか？」
「吠えろ坂本。点数差を見ても、まだ勝算はあると言うのか？」

「さぁな。だが…あのバカには多少なりとも楽にさせなきゃ、こっちに勝ち目は無い…行かせてもらうっ！」
「！！」
まず仕掛けたのは雄二。得意の接近戦で一気に勝負を決める気か！だけど…
「悪いな坂本。俺の間合いだな」
「何いっ！？」

瑠奈君は剣を地に刺したかと思うと、それを踏み台にして飛び上がった。拳を空振りした雄二は無防備…まずいっ！
「雄二！上だぁっ！」
「言われなくても分かってんだよぉっ！」
だが、かろうじて体勢を建て直した雄二の召喚獣は今度は衝撃波を飛ばした。それを瑠奈君はガードして防ぐ
「はっ！飛び上がっただけか、見かけ倒しだな！？」
「…」
雄二の挑発に対し、瑠奈君は無言。そして召喚獣は構えを取るが、攻める気配は無かった
「…気配が、変わった！？」
瑠奈君は待ちの態勢に変わっていた。…リーチを考えると、雄二は迂濶に攻められない。…もう、雄二の性格に気付いたか！
「…坂本、厳しい」
「あやつは格闘で押すタイプじゃからのう…待たれては攻めにくい」
「…かと言って、雄二の事だから迂濶な手は使わない。あいつなら…」
雄二は昔「神童」とまで呼ばれてた男だ。そんな奴が簡単に…
「行くぜぇぇっ！！」
「なぁっ！？」
その刹那、瑠奈君が急に猛攻を始めた。雄二は一瞬反応が遅れたが、

やっぱり腐っても神童。しっかり打ち返す

文月学園副将　坂本雄二
社会　１０４点
対
暁学園大将　烈火瑠奈
社会　１６５点

「へっ…中々やるな、瑠奈とやらよぉっ！」
「ふっ…面白い奴だ。戦中に相手を称えるとはなっ！」
拳対拳がぶつかりあう。このままなら…相討ちか！だが…
「！雄二っ！？」
雄二の召喚獣が踏み込んだ途端に、急に転んでしまった。一体何が…
「…貴様っ、地面を割っていたな！？」
「ご名答。さすがは神童だな？だが…終わりだっ！」
瑠奈君は地面に刺した剣を抜き、雄二の召喚獣を切り捨てた。…雄二が、負けた！？

文月学園副将　坂本雄二
社会　０点　戦死
対
暁学園大将　烈火瑠奈
社会　１２８点

「すまねぇ明久。俺はここまでだったらしい」
雄二が肩を落として帰ってくる。そういえば、雄二が試召対決で負けたの、霧島さんに負けた時しか見てないかも…
「最後はお前だ明久。…気張っていけよ！」
「ＯＫ雄二、絶対に勝って見せるさ！」
雄二とハイタッチしてフィールドに向かう僕。皆の為…負けられな

い！

「…お前か、吉井明久ってバカは」
「出会っていきなりバカは失礼じゃないかな？」
「だが、大将である以上、お前にも力がある。…全力で迎え撃たせてもらうぜ」
不敵な笑みを浮かべる瑠奈君。…だけど、僕も負けられないんだ！
「余裕なのも、今のうちさ。勝つのは僕たちだ！サモンッ！」
「サモンだ！」
そして互いの召喚獣が現れる…。これで…最後だ！

最終問題

バカテスト～理科～

S極とN極のある磁石を二つに切った場合、その磁石は果たしてどうなるか答えよ。

島田美波の答え
「S極とN極のある磁石が二つになる」
先生のコメント
正解です。

木下秀吉の答え
「S極のみの磁石とN極のみの磁石になる」
先生のコメント
違います。ただ、陥りやすい間違いですね

吉井明久の答え
「ハサミじゃ石は切れないので、切れない」
先生のコメント
問題をバカにしているのですか

「「サモンッ！！」」
相手の大将、瑠奈君との直接対決になった吉井明久は、最終戦に日本史を選択した

文月学園大将　吉井明久
日本史　１７５点

対
暁学園大将　烈火瑠奈
日本史　１７４点

「ちっ…坂本に削られたのが響いたか！」
「これなら…勝てる！」
僕は元々日本史は得意だし、さっきの補充テストも受けたのは日本史。それに僕は誇ることじゃないけど観察処分者なんだ。…勝てる！だけど瑠奈君は雄二の時と同じく刀を地面に突き刺し、待ちの姿勢に入った。…だけど、甘いねっ！
「その技は…さっき見切ったぁぁっ！」
「…」
僕はさっきその技を見ているんだ、通用しない事くらい、彼も分かってるとは思う…けど、ただ何もしないっていうのも、なんか嫌だ！！
僕は飛び上がり、頭上から瑠奈君を切り捨てにかかる！
だがうまくは行かなかった。…いや、瑠奈君が一枚上手だったんだ
瑠奈君は僕の木刀を紙一重でかわし、瑠奈君の拳が僕の召喚獣を捉えた。僕は観察処分者だから、身体に痛みがはしる

文月学園大将　吉井明久
日本史　７５点
対
暁学園大将　烈火瑠奈
日本史　１２８点

かなり点数を持ってかれた…このままじゃ…

「おい明久ぁっ！根性みせやがれっ！！」
そこに雄二の檄が飛んでくる。それに皆の声援も…

「明久よ、ワシは信じとるぞぉっ！」
「…ファイト」
…こんなにも仲間が居るんだ…僕は…
「アキ！…ウチ、アキが勝つって信じてる！」
「明久くん、頑張ってください！」
…負けられない！
「…瑠奈君、悪いけどこの勝負、僕の勝ちだ！」
「ほう…お前、何が根拠だ？」
瑠奈君は怪訝そうな顔で僕を見つめる。僕はそんな瑠奈君に対し、笑って答える
「だって僕は…負けられない理由があるから！」
僕は召喚獣を瑠奈君の召喚獣の真っ正面に突っ込ませる
「…っ、無策に突っ込んでくるか！愚かな…切り捨ててやるよぉっ！」
瑠奈君は刀を引き抜き、間合いに入ったら切り伏せる構えを取った。だけど、僕の狙いはそこだ！
「食らえええっ！」
「！？何っ！？」
僕は木刀を瑠奈君の召喚獣目掛け投げさせる。瑠奈君は狼狽して木刀を弾くけど、もう手遅れだ！
「もらったぁぁあっ！」
「…しまった！？それが狙いかぁぁっ！」
僕は召喚獣を瑠奈君の召喚獣に思いっきり体当たりをさせた…そして…

＝文月学園＝

「…以上の通りだ。暁学園に勝利した報酬としてランクダウンした設備を元のランクに戻すことを認めるそうだ。バカなりによく頑張

ったな、お前達」
「…あんだけ頑張ってもランクが戻る程度かよ…」
「本当だよね…せっかく勝ったのに…」
僕らはあの戦いに勝利し、Ｆクラスの設備が昔のちゃぶ台と畳の設備に戻ることになった。そして…
「それと、だ。このクラスに今日から二人転校生が来る。本来ならクラス振り分けテストを経てクラスに入るんだが…どんな物好きか分からんが、本人達たっての希望で、我らＦクラスに入る事になった」
「おいおぃ、転校生だってよ！」
「美人かなぁ…」
僕らのクラスに転校生が来ることになった。この時期の転校生って、随分変なタイミングな気がするんだけど…
「じゃあ、二人、入れ」
「…よろしくな、吉井、明久？」
「よろしくお願いしますね、吉井さん、坂本さん？」
「～っ！？」
思わず吹いた。転校生って…暁学園の烈火瑠奈君と、光瑠璃さんの事ぉっ！？

僕と瑠奈君と試召戦争！

＝2‐F＝

吉井明久は今日も普通に登校した
「よっ、今日も1日よろしくな、吉井」
「あ、お、おはよう烈火君…」
「おはようございます、吉井君♪今日も元気そうで何よりです♪」
「お、おはよう光さん…」
吉井明久は困惑していた。つい先日は暁学園代表だった人たちが今、同じ教室で授業を受けているのだから
何でだ…何でこうなった！？僕が勝ったらこうなるなんて話、聞いてない！
「明久、お前もそう思うか？」
「うん、雄二も同じ考え…って、僕まだ何も言ってないんだけど？」
「おぃ明久、1年も一緒に居たらお前みたいなバカの考えてることくらい分かる」
バカとは失礼な。それにたったの1年だ、その程度で分かるって、君は神かい
「お、坂本と吉井。いつも昼飯はどうしてんだ？」
そこに烈火君が来る。…どうも違和感だらけだ。第一、急に転校生なんて…
「俺たちはいつものメンバーでこの教室で飯を食ってるが？」
「そうか、悪いが瑠璃をその中に混ぜてやってくれないか？」
烈火君は光さんが僕たちと一緒にご飯を食べることを希望している。…何でだろ？
「だそうだが、どうする明久？今更一人や二人増えても変わらないだろ？」
「そうだね。それに、ご飯は大人数で食べたほうが楽しいし、おい

しいしね！」
「決まりだな！俺は昼に用事があって少し抜けるが、早く終わったらそっちに行くつもりだ、だから、瑠璃を頼むぜ？」
「あぁ、任せといてよ！」
そういい残すと、烈火君は自分の席に戻っていった。…朝からお昼のはなしか、烈火君、何かあるのかな？
「明久」
「…雄二、やっぱり雄二も疑問に思った？」
さすがは雄二、気付くのが早いな
「あまりにも不自然すぎる。何か憎悪の様な感じを受ける」
「てことは、もしかして…」
「あぁ、文月学園の誰かに喧嘩を売られ、それを買ったな」
「どうするの雄二、止めに行く？」
僕のこの問いにしばし雄二は考えたが
「いや、止めには入らない」
雄二は止めに入るつもりは無いらしい。確かに、まだ僕らにとっては他人だけど、でも…
「明久、止めたいのか？」「…なんか嫌な予感がするんだよね～」
「あ、あの～…」
そう話をしてると光さんがこっちに来ていた。光さんは照れ屋なのか、僕らと目を合わせずに
「し、島田さんと、姫路さんはどこに居ますか…？」
と聞いてくる。やっぱり女子と一緒に居るのが安心なのかな？美波と姫路さんはどこに居たっけな…
「ごめん、分からないや」
「そうですか…ちょっと探してきますね？」
光さんが笑顔で会釈して教室を出ていく。…天使の笑顔だなぁ…
「明久、気持ち悪い、急ににやけるな」
「う、うるさいな雄二！」
そしてお昼…

＝文月学園、屋上＝

「…ははっ、呼び出しはお前かよ。…根本恭二、だったか？」

明久達が昼食中、烈火君は今根本恭二と対峙していた。立ち会いに長谷川先生が居た

「そうだ、俺がBクラス代表の根本だ。そして、俺は今からお前に提案がある。要求を飲むんならよし、飲まないのなら…」

「戦うってんだな…で、要求は？」

根本は不敵に笑い、烈火に

「我がBクラスに来ないか？」

「…」

烈火は転校生の身であり、学園長との約束でまだクラスは固定されていないのだ。学力は学年首席クラスなので、どのクラスにも欲しい人材であった

「…悪いが、嫌だね」

「何故だい？なぜ君がFクラスにこだわる？あのクラスに居たら君も馬鹿になってしまうだろう？」

「悪いが、お前に馬鹿にされるようなクラスには俺は見えない。…来いよ、全力で潰してやる」

「はっ。…聞けないのなら今潰す。Ｆクラスにリベンジするためだ、覚悟しろ！」

そして周りからＢクラスの生徒が現れる。１対５になるようだ

「負けたらこっちに来い。実力行使だ」

その言葉に対し、烈火も不敵に笑う。そして…

「悪いが、負ける気がしねぇ。…２‐Ｆ、烈火瑠奈！数学勝負を申し込む！」

「承認します！」

長谷川先生が召喚フィールドを展開し、戦いが始まる…

「試験召喚獣！サモンッ！」

そのころ、Ｆクラスでは…

「…明久、雄二。烈火が試召対決を始めた」

ムッツリーニが烈火が戦い始めたことを雄二と明久に伝える

「なんだって！？相手は！？」

「…Ｂクラス」

「なるほどな。狙いは烈火本人って訳か」

「雄二！？どういうことだよ！？」

「烈火はまだ転校生の身だ。振り分け試験もまだらしいから、どのクラスにも居れる。あいつの学力を多分狙われたんだろう」

「坂本君！どうするんですか！？」

「アキ、どうするの！？相手は数であの人に…」

美波と姫路さんが言い寄ってくる。…光さんが居ないところを見ると、多分つらいんだろうな

「わざわざ全員行く必要は無いだろうが、万が一という事はある。島田、悪いが偵察に行ってくれ」

雄二は美波に偵察を指示した。…なんで偵察？加勢じゃないの？

「明久、烈火が単身で行った理由、まだ分からないか？」

「分からないよ。いくら烈火君が学力が高いっていったって、相手が数で攻めてきたら…」

「なら明久、お前も島田と行ってこい」

雄二は俺にも行くように言う。姫路さんも行きたそうにしてたけど

「姫路は待機だ。お前まで行くと相手に逃げられる」

と止められた。そして僕と美波は屋上に向かうと…

Ｆクラス　烈火瑠奈
数学　３３９点
対
Ｂクラス　根本恭二
数学　０点　戦死

「ば、バカな…」

Ｂクラスは既に烈火君に負けていた。…烈火君の強さって、どんなレベルだよ…

そしてＢクラスの連中が鉄人の補習に連れ去られると、烈火君は僕らに気付き、こっちに歩いてきた

「吉井に、島田か。どうした？」

「…烈火君、今のは」

「あぁ、あのバカか？悪いが相手にならねぇ。五人がかりで俺に傷ひとつつけられないんだぜ？」

「嘘…数学得意な私でも複数の敵と当たるのは無理よ！？」

美波の驚きも分かる。僕も特殊ではあるけど、さすがに複数はきつい。それを烈火君は軽くやってのけたのか…

「坂本に伝えてくれ、ＢクラスがＦクラスに宣戦布告をしてきた。明日、Ｂクラスと試召戦争だってな」

「明日！？なんでまた…」

その僕の問いに烈火君は呆れたように

「どうせ狙いは俺か瑠璃だろ？…ったく、どうかしてるぜ…」

そう言い残し、烈火君は帰っていった

「アキ、早く坂本に伝えよう！」

「ああ、行くよ美波！」

そして次の日明久達はＢクラスと試召戦争をすることになった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7593s/

ANOTHER BAKA STORY～バカとテストと召喚獣＋～

2011年10月8日02時17分発行